

伝藤原公任筆『古今和歌集』考

立石 大樹

はじめに

平成になって出現した伝藤原公任筆本『古今和歌集』（以下、公任筆本と略す）は、平安朝書写の『古今和歌集』の完本として注目される。平安朝書写の『古今和歌集』は約三〇種伝わるというが、従来、完本たる遺品は国宝・元永本『古今和歌集』一本が知られていた。そこに、平成になって突如、同じく平安書写の完本という形で公任筆本が出現したというのは、まことに研究史上、意味のあることと言える。既に、この公任筆本は小松茂美氏によって全カラー図版で出版されており、容易にその全貌をうかがうことができるようになっていた。

さて、この公任筆本についてはすでにいくつかの指摘がある。が、その研究はまだ始まったばかりであろう。本稿では、公任

筆本について稿者なりに考えたことを幾つかまとめてみたい。

一、問題の所在

書誌は小松氏に詳しいため割愛する。公任筆本は片桐洋一氏によれば「意外に精選された整った本」、田中登氏によれば「その骨格においては意外に定家本との距離が近い」と指摘されている。

一―① 異本歌・墨減歌の問題

公任筆本の異本歌は一首だけで、流布本である定家本二二六番歌の次に、

をみなへしなきなやたちし白露をぬれぎぬにのみきてわた
るらん

の一首を持つのみである。ただし、当該歌は、公任筆本以外にも基俊本・元永本・関戸本に見える歌であるので、公任筆本のみが持つのではなく、編集のある段階では『古今和歌集』に存在した歌であるとしてよからう。

また、公任筆本は、定家本の巻末にあつて本文中からは削除されている「墨滅歌」を本文中に持たない。そのような形態を大きな面から公任筆本を見ると、確かにずいぶん整いつつあった時期の『古今和歌集』の姿を示しているように思われる。

一 ② 歌の欠落の問題

右に見たよう、公任筆本は異本歌がわずか一首、墨滅歌も本文中になく、精選されたかのような形態をもちながら、歌の欠落と思しき箇所が多い。新編国歌大観番号で示す。

- ① 一五八番歌欠
- ② 二三四番歌欠
- ③ 四八二番歌欠

④ 六六〇番歌欠

⑤ 七六四番歌欠

⑥ 八三二番歌欠

⑦ 一〇三五番歌欠

⑧ 一〇五四番歌欠

⑨ 一〇五五番歌欠

以上、九首の欠落が見られる。片桐氏は、

これらは本来的になかったというよりも、たとえば右の八四二「あふことをくもぬはるかに……」が次の四八三番歌の「つらゆき」とともに脱落していることや、一〇三五の和歌と次の一〇三六の作者名「ただみね」が一括して脱落したことは明らかである。また一〇五四番歌の詞書と作者名の後、「一〇五四の歌「よそながら……」と一〇五五の「題しらず さぬき」と「ねぎごと……」という歌を欠いているのも、本来的な歌の脱落ではなく、前述した迂闊さと、粗忽さゆえに、間の歌を抜かしたままに書写してしまったせいとすべきであろう。

と指摘される。後述するが、公任筆本には誤写の類が多く見られ、どうやら厳密な書写態度で写された本とは言えない。

一③ 歌序の問題

次に、歌序の相違を確認する。公任筆本は、定家本に比して歌序の相違が五箇所ある。新編国歌大観番号で示せば次のとおりである。

- ① 七六番歌と七七番歌が逆
 - ② 一一七番歌と一一八番歌が逆
 - ③ 一五三番歌・一五四番歌の前に一五五番歌がある
 - ④ 三〇六番歌と三〇七番歌が逆
 - ⑤ 六九四番歌と六九五番歌が逆
- しかし、この歌序はいずれも公任筆本独自のものではない。平安朝に行われていたいずれかの諸本に見られる歌序の相違である。田中氏は「この点に関しては、平安時代のありし日に実際に行われていた古今集の姿を、この伝公任筆本も伝えているということができよう」と指摘されている。

一④ 作者名の表記の問題

次に、公任筆本には作者名表記での問題がある。作者名の表記においては随分と独自で、意図的な表記が見られることはす

でに指摘されている。表で示すと、

定家本など	公任筆本
躬恒	三常
利貞	年さた
宗子	致行
淑望	吉持
業平	成平
仲磨	中丸
美材	吉木
国経	郡常
定文	定風
友則	友慈
真静法師	心性法師
惟喬親王	是高のみこ
宗貞	致定

などが見られる。これらは表記の問題にも関わってくるため、本稿では敢えて触れないでおく。

一⑤ 誤脱の問題

次に、公任筆本の本文についてはどのような特色が見られるか。確かに、その書写態度には「迂闊さと、粗忽さ」としか考

えられないケアレスマスの多い本文である。数例を示す。

九番歌は定家本では、(定家本は、以下、嘉禄二年本で示し、歌番号は新編国歌大観番号を用いる)

雪のふりけるをよめる

きのつらゆき

霞たちこのめはるの雪ふれは花なきさとも花そちりける
とある。詞書には諸本に異同はないが、公任筆本のみ詞書を持たない。誤脱と考えてよからう。

三〇七番歌は定家本で、

題しらす

よみ人しらす

ほにもいてぬ山田をもると藤衣いなばのつゆにぬれぬ日は
なし

とあるが、公任筆本のみ詞書も、作者名もない。同じく、誤脱と思われる箇所が見受けられる。

五〇番歌(巻第一・春歌上)では定家本で、

題しらす

よみ人しらす

山高み人もすさぬさくら花いたくなわひそ我身はやさむ

又はさと、をみ人もすさぬやまさくら

とあるが、公任筆本のみ左注を持たない。このような誤脱と思しき例は多く散見され、これらは公任筆本か、あるいは公任筆本が拠った親本の誤写・誤脱と考えられる。この他、紙面の都合上、割愛するが、先に指摘した表記の独自性を除いても、作者名を誤って書写の段階で落としたと思しき箇所も多い。

一⑥ 誤写の問題

誤脱の他にも、誤写と思しき箇所も多い。数例示すと、二三番歌は定家本で

やよひのつごもりの日花つみよりかへりける女どもを
見てよめる

みつね

と、むべき物とはなしにはかなくもちる花ごとにとだぐふ心
か

とあるのに対し、四句目「ちる花ごと」が公任筆本では「ちるごと」となっている。諸本はいずれも定家本に一致している。

一四二番歌が定家本では、

をとほ山をこえける時に郭公のなくをき、てよめる

紀友則

をと山けさこえくれば郭公こずえはるかに今ぞなくなる
とあるのに対し、詞書の「こえける時に」が公任筆本は「こえ
けるに」になっているが、諸本はいずれも定家本に一致している。

一四四番歌が定家本で、

ならのいその神でらにて郭公のなくをよめる

磯神ふるき都に時鳥声許こそ昔なりけれ

のとなつてゐるのに対し、二句目「ふるき都に」が公任筆本で
は「ふるきみやまの」になっている。諸本は定家本に一致して
いる。

以下省略するが、このように、公任筆本の誤写・誤脱と思し
き箇所はこれに限らず多い。一つ一つ挙げてゆけば、その数は
枚挙にいとまない。紙面の都合上、巻第一・第二の春部に限定
して、多くの諸本には見られない公任筆本のみが持つ、誤写・
誤脱と思しき可能性のある箇所を絞って示せば、

歌番号	定家本	公任筆本
9	調書アリ	ナシ
17	若草の	鶯の
19	み山には	み山に
30	かりのこゑを	かりのこゑ

133	人に	ナシ
132	ちる花ことに	ちることに
131	をんなどもを見て	をんなどもにみて
121	ひととせに	ナシ
	こそまのさきの	こしまの
120	橘の	ふちはなの
106	すきかてにのみ	すきかたにのみ
94	ふれたる	ふれつる
	はるのうた	春うた
90	花はさきけり	花はさきける
89	色はかはらす	いろかはらすそ
84	水なきそらに	みつなきそらも
81	花の	はなや
77	さくらの花の	さくらの
76	詞書アリ	ナシ
67	さくらの花の	さくらの
50	さけりけるを	さけるを
41	左注アリ	ナシ
39	梅花を	梅を
32	はるのよ	はるの
	しるくそ有ける	しるくさりける
	うくひすのなく	うくひすそなく

のように散見される。見落としもあるが、これらは現存諸本

との比較において、誤写・誤脱と考えられる（解釈が十分可能なものもあるが、今は触れないでおく）。ともかく、公任筆本の書写態度は、片桐氏の言を借りれば「迂闊さと粗忽さ」ともいえる箇所もあり、忠実に写そうという書写態度で写された本とは言えない部分が多々見られることは事実として認めねばなるまい。これは、その書写が定家のような証本を作ろうとした態度とは違う、平安朝における、ある日の、ある一書写者の書写における姿勢をそのまま示しているのであらう。

以上見てきたように、公任筆本は本文に問題を含んでいることは事実である。しかし、片桐氏による「意外に精選された整った本」、田中氏による「その骨格においては意外に定家本との距離が近い」との指摘をどう考えればよいか。公任筆本の形態として注視すべきは、いわゆる定家本の巻末に付されている「墨滅歌」を本文中に持たないということである。

二、墨滅歌について

鎌倉以降、藤原定家崇拜熱によって定家本が圧倒的な地位を獲得した。そのため、以降、定家本が流布し、『古今和歌集』の現存諸本は圧倒的な数で定家本系統に属する。この事情は「後

撰和歌集」「拾遺和歌集」と同様である。その定家本「古今和歌集」の巻末を見ると次のごとくある。周知の資料だが、定家本のうち嘉祿二年本で示す。

家々称証本之本作書人以墨滅歌 今別書之（家々に証本と称するところの本に書入れ乍ら墨を以て滅ちたる歌 今別に之を書く）

これは、俊成本や、その他の家々に証本と称していた『古今和歌集』では、本文中に歌を採用していながらミセケチにしていた歌を、定家は敢えて本文中から除き、巻末に別に置いたことを言っている点、所謂、墨滅歌の説明である。定家本の本文は、父・俊成の俊成本に基づいている。俊成本はこれら墨滅歌十一首を本文中に持ちながら、ミセケチするという処置をしている。それを敢えて定家は本文中から除き、巻末に置くという処置をした。つまり、巻末に墨滅歌を持っていれば、それだけで定家本系統ということになる。

では、定家本本文の基となった俊成本は、なぜこれら十一首を本文に置きながらミセケチ処理したのかといえ、それは新院御本に拠っているからである。新院御本は崇徳院のところに

あったものだが、そのもの自体は現存していない。ただし、その新院御本を写した系統にあたる雅経本や今城切、あるいは新院御本を校訂に採用した清輔本から伺える。実際、雅経本や今城切はこれら十一首を持たない。また、清輔本でも本文中に持たないか、あるいは持っているも新院御本にはない旨を注記している。また、俊成も新院御本を書写したことは知られている。俊成本・定家本のこの墨滅歌の扱いは新院御本の影響にある。

ここで、公任筆本も新院御本と同じく、これら十一首を本文中に持っていないことに注意したい。そのような形態の上から考えれば、公任筆本は新院御本と何らかの関係があるように思われる。事実、既に片桐氏に指摘があるが、公任筆本は新院御本の流れにある雅経本と共通する箇所が多く見られるという。

三、公任筆本と雅経本の距離

公任筆本は墨滅歌を本文中に持たない点で、形態として新院御本と関係があると思われるのは右に見てきたとおりである。そのことが公任筆本が俊成・定家本に近い精選された形態と言われる要因の一つであろうと考えられる。

その上で、公任筆本の本文を諸本と比較した際、先に挙げた

ような公任筆本の誤写・誤脱と思しき箇所を除いてみれば、必ずしも公任筆本が新院御本の流れにある雅経本に格別近いとは言えないようである。以下、『古今和歌集』の流布本である定家本と公任筆本の距離をはかりつつ、数例確認しておきたい。

八七番歌は、定家本では、

ひえにのほりて、かへりまうできてよめる

つらゆき

山たかみ、つ、わがこし桜花風は心にまかすべらなり
とある。公任筆本では

比叡にのほりて、花を見てかへりまうできてよめる

貫之

山たかみ、つ、我こしさくらばな風は心のまかすべらなり
とある。右に引いた傍線部、公任筆本に雅経本は一致している。
が、その他、基俊本・雅俗山莊本・静嘉堂文庫本・六条家本・
前田家本・天理図書館本・伏見宮本・建久二年本などその他諸
本にも多く一致している。俊成の建久二年本も一致することが
注目される。

二六八番歌は定家本では、

人のせんざいに菊にむすびつけて うへける歌

在原なりひら朝臣

うへしうへば秋なき時やさかざらむ花こそちらめねさへか
れめや

とあるが、公任筆本では、

人の前裁のきくにゆひつけて うゑたりけるうた

在原成平朝臣

うへしうへばあきなきとしやさかざらんはなこそちらめね
さへかれめや

とある。「前裁に」や「うゑたりける」は公任筆本の独自異文で誤写かとも判断できる。作者名表記についてはここでは敢えて触れないでおく。定家本の「むすびつて」が公任筆本では「ゆひつて」とあり、これに雅経本も一致している。その他、雅俗山荘本・静嘉堂文庫本・六条家本・永治本・前田家本・天理図書館本・伏見宮本・高野切も一致しており、必ずしも雅経本とだけ一致しているわけではない。

三二六番歌は定家本で、

題しらず

よみ人しらず

おほそらの月のひかりしきよければ影見し水ぞまづ氷ける
とある。公任筆本では、

題不知

よみ人しらず

おほそらの月のひかりしさむければ影見しみづぞまづこほ
りける

とある。定家本の「きよければ」が公任筆本では「さむければ」とあつて異同が見られる。公任筆本に雅経本は一致しているが、他に、善海所伝本・基俊本・筋切・元永本・六条家本・永治本・前田家本・天理図書館本・伏見宮本・建久二年本などとも一致しており、必ずしも雅経本とばかり共通しているわけではないことが知られよう。

四三二番歌は定家本で

やまがきの木

よみ人しらず

秋はきぬ今やまがきのきりくすよなくなかむ風のさむ
さに

とあるが、公任筆本では、

山がきの木

よみ人しらず

あき立ていまやまがきのきりくすよなくなかむさぜの
さむさに

とあつて、定家本の「あきはきぬ」に対して公任筆本の「あき

立て」は対立している。雅経本と、同じ新院御本の流れにある
今城切も一致しているが、その他に、善海所伝本・本阿弥切・
基俊本・筋切・元永本・雅俗山莊本・六条家本・永治本・前田
家本・天理図書館本・伏見宮本も公任筆本に一致している。

五三九番歌は定家本で、

打わびてよば、むこゑに山びこのこたへぬ山はあらじとぞ
思

とある。公任筆本では、

うちわびてよばむこゑに山びこのこたへぬそらはあらじと
ぞ思

とある。異同があるが、雅経本は公任筆本と一致している。他
に、本阿弥切・志香須賀文庫本・基俊本・元永本・雅俗山莊本・
六条家本・寛親本・永治本・前田家本・天理図書館本・伏見院
本・伝後鳥羽院本・永暦二年本・建仁二年本・中山切が一致し
ている。

八一二番歌は定家本では、

あふことのものはらたえぬる時にこそ人のこひしき事もしり
けれ

とあるのに対し、公任筆本では、

あふことのいとまたえぬるときにこそ人のこひしきことも

しりぬれ

とあり、対立している。公任筆本に雅経本は一致しているが、
志香須賀文庫本・元永本・雅俗山莊本・六条家本・前田家本・
天理図書館本・伏見宮本・伝後鳥羽院本・右衛門切・永暦二年
本異本注記・建久二年本に一致している。

以上、数例を掲げてみた。見落としもあるが、公任筆本と
定家本が対立し、公任筆本と雅経本とが一致するような例は、
九十箇所ある。そのうち、公任筆本が雅経本とのみ一致してい
る箇所は、わずかに五十九番歌が、

歌たてまつれとおほせられし時によみてたてまつれる

桜花さきにけらしなあしひきの山のかひより見ゆる白雲
と定家本にあるのに対し、結句「たてまつれる」が公任筆本・
雅経本では「よみてたてまつりける」となっているくらいなも
のである。

このほか、公任筆本出現前に、西下経一氏が雅経本の独自異
文と見ておられた箇所、公任筆本と一致するのは一箇所であ
る。十四番歌が定家本では、

大江千里

うぐひすの谷よりいづるこゑなくは春くることをたれかし
らまし

とあるが、結句「たれかしらまし」が、公任筆本・雅経本で「たれかつげまし」と一致しているだけである。そのほかは、誤写と思しきものを除き、いずれかの諸本と一致している。

このように見てくると、公任筆本が特別、雅経本に近いというよりは、公任筆本も雅経本ばかりでなく、平安朝に行われていた多くの諸本と一致していることだろう。また、新院御本を校訂に採用している清輔本・俊成本と一致する場合も多い。もちろん、細かい異同はあるが、大きな観点で見ると、公任筆本も、雅経本も諸本の中において際立った特殊な本文であるとは言えまい。あくまで、平安後期に広く読まれていた『古今和歌集』本文の一つの姿を公任筆本も雅経本もそれぞれに伝えているということだろう。

四、公任筆本と俊成・定家本

久曾神昇氏¹⁰によれば、新院御本は、第五次本、即ち、『古今和歌集』成立の段階でも、相当、後の段階と想定されている。公任筆本も、その時期に広く流布していた本文・形態の、一つの姿を持っているとみられる。このことは先に見たよう、公任筆本が大きな観点では、多くの平安朝に行われていた本文と一致

することから明らかであろう。久曾神氏によって同じ五次本に分類されるのは、清輔本校合本や俊成本、定家本などである。公任筆本が俊成本や、その俊成本を基にした定家本と近いとされるのも、そのためであろう。

さて、公任筆本が俊成本と一致する箇所は先に見た例以外にも多く見られる。今、俊成の建仁二年本に限って、簡略にいくつか挙げてみる。

・一二八番歌（定家本）「きこえさりけるを」…（公任筆本・建久二年本）「きこえさりければ」

・二九八番歌（定家本）「秋のうた」…（公任筆本・建久二年本）「あきのうたとてよめる」

・三八八番歌（定家本）「わかれおしみけるによめる」…（公任筆本・建久二年本）「わかれをしみければよめる」

・四二二番歌（定家本）「きるべきに」…（公任筆本・建久二年本）「きるべきを」

・五〇一番歌（定家本）「成にけらしも」…（公任筆本・建久二年本）「なりにけるかな」

・五四九番歌（定家本）「こひずしもあらむ」…（公任筆本・建久二年本）「こひをせざらむ」

・六八九番歌（定家本）「又はうちのたまひめ」…（公任筆本・

建久二年本)「ナシ」

・七二三番歌(定家本)「あだ浪はたて」…(公任筆本・建久二年本)「うはなみやたて」

・八二二番歌(定家本)「もはらたえぬる」…(公任筆本・建久二年本)「いとまたえぬる」

・八七一番歌(定家本)「思いづらめ」…(公任筆本・建久二年本)「おもひしるらめ」

・九五九番歌(定家本)「はしにわが身は」…(公任筆本・建久二年本)「ふしにわが身は」

・一〇二二番歌(定家本)「たゝるに我は」…(公任筆本・建久二年本)「たゝるにしあれば」

以上のように、定家本の本文と、俊成本の本文が対立しているが、その俊成本が公任筆本と一致している事例は多い。公任筆本は定家本よりは本文的に俊成本に親しいとみられる。やはり、定家本というのは、かなり特殊な本文であるということが改めて知られる。ただし、これらは、先の雅經本同様に、平安朝に行われていた、いずれかの諸本にも多く共通している。

だが、その俊成本は、二類に分かたれる。浅田徹氏¹⁾に詳しいが、俊成本は、

・一類本 家のために研究的に作られた本(書陵部A・B本、

昭和切、了佐切、顕広切、慶融本、伝寂蓮本)

・二類本 嫡子以外の他家へ見せるための本(建久二年本、寂惠本、古今問答所引本)

に分かれるという。詳細は浅田氏を参照いただきたいが、俊成本はこの二種類の俊成本を生涯同時使用していたようである。公任筆本に近い俊成本は二類本である。

一類本は先に見たよう、墨滅歌を本文中に持ちながらミセケチ処理している。その他、本文中に異本注記を多く持つ。一方、二類本は墨滅歌を本文中に持たない。また、一類本の異本注記の方を本文に採用している。二類本は、より平安朝に行われていた本文を色濃く残しているのである。定家に相続されたと見られているのは一類本の昭和切である。

「歌の家」として研究的要素を残すため定家に相続する本にはミセケチ処置で「もともとはこの歌があつた」ということをはっきり残したのが一類本であろう。そして、当時、三証本と言われ権威ある本とされた新院御本に従って墨滅歌を本文から削除し、平安朝の流布していた本文を採用したのが二類本ということになるのか。ともかく、俊成は、墨滅歌を本文中に持たない形態の方が、対外的には権威ある本と考えていたようである。あるいは、その形態の方が、平安末の『古今和歌集』の流布本

の姿といえるかもしれない。

公任筆本の書写が、新院御本に先立つかどうかを本稿では検討する余裕はないが、新院御本が現在しない今日、公任筆本は、墨滅歌を持たない最古写本といえる。墨滅歌を本文中に持たない形態が平安後期に広くあつたことを公任筆本も伝えていると思うのである。定家が、本文中から墨滅歌十一首を本文中から除いたのは、公任筆本のような平安後期の『古今和歌集』の形態こそ、是と判断したからであろう。この処置は、あくまで定家独自の判断ではなく、当時、公任筆本のような、普く流布していた『古今和歌集』の形態に拠つたものと考えられる。それほどに、平安後期の『古今和歌集』は、墨滅歌を持たない形態が流布本として広まっていたとみられる。

また、公任筆本は、定家本に近いとされてきたが、実際の本文は、平安後期の本文を色濃く残しながら、俊成本にも親しかった。平安後期の本文から俊成本へ、俊成本から定家本へという、『古今和歌集』本文の動きを考える上で、甚だ重要であろう。従来知られていた諸本に加え、公任筆本も平安後期の『古今和歌集』の流布の実態を伝える重要な位置にあることを念頭に置いておきたい。

おわりに

以上、大まかに見てきたように、公任筆本は誤写・誤脱と思しき問題点を持ちながらも、平安朝後期に行なわれていた『古今和歌集』のあるべき一つの本文・形態をはつきりと持っている。それは、平安後期から定家本へ、という『古今和歌集』の本文の動きを考える上でも、重要な情報を示しているよう。今後は、さらに、詳細に考察を加え『古今和歌集』本文研究上での活用を図ってゆきたいと考える。

〔注〕

- (1) 小松茂美氏『伝藤原公任筆 古今和歌集』(平成七年 旺文社)
- (2) (1)に同じ。
- (3) 片桐洋一氏『古今集の本文』(『古今和歌集研究集成』第二巻所収 平成十六年 風間書房)
- (4) 田中登氏『古今和歌集の古写本―伝公任筆本と定家との距離―』(国文学 解釈と教材の研究)平成十六年十一月号所収 學燈社)
- (5) (3)に同じ。

(6) (3) に同じ。

(7) (4) に同じ。

(8) (3) に同じ。

(9) 西下経一氏「雅經本の内容」(『古今集の傳本の研究』昭和二十九年 明治書院)

(10) 久曾神昇氏「古今和歌集成立論 研究編」(昭和三十六年 風間書房)

(11) 浅田徹氏「俊成本古今集試論—伝本分立の解釈私論—」

(『和歌文学研究』第六十五号所収 平成五年)

(たていし だいき／本学非常勤講師)